

社団法人 日本アメリカンフットボール協会
加盟団体 各位

2013年8月29日
日本アメリカンフットボール協会熱中症事故緊急対策本部

熱中症再発防止提言

今般の熱中症事故を踏まえ、加盟競技団体主催の今秋リーグ戦における再発防止策と、中長期的な再発防止策の検討を行い、下記のとおり提言いたします。今秋リーグ戦における対策については、早急に加盟競技団体にご周知頂き、再発防止に努めて頂くよう、お願いいたします。

【今秋のリーグ戦における対策】

試合開始の判断、試合中における熱中症防止の特別運営については主催者、試合管理責任者、両チーム監督、審判、合意のもと実施する。

1. 環境条件を把握し、試合開催の可否を判断する

試合に先立ち、湿球黒球温度（WBGT）や、気温を確認し、試合が出来る状況かどうかを判断する。

- ・WBGT31℃、あるいは気温 35℃を超えた場合、試合は行わない。
- ・WBGT27℃、あるいは気温 30℃を超えて試合を行う場合、熱中症防止対策を十分に検討する。
- ・試合開始前はもちろん、ハーフタイムにも環境条件を確認し、必要に応じて後半の開始を遅らせる等の処置をとる。
- ・上記以外の環境下でも必要に応じて、熱中症防止対策を十分に検討する。

2. 熱中症防止の会場環境を整える

熱中症を防止するため、あるいは熱中症と疑われるような症状になったとき、直ぐに処置を出来る会場環境を、下記の例を参考にして整える

- ・直射日光を避けるためのテント、ミスト扇風機等、選手の体を冷やすための器具をベンチエリア内に設置する
- ・チームで持ち込む氷を補完する意味で、会場で十分な氷を供給できる体制を整える。
- ・万一の救急搬送に備え、受け入れ病院の確保を行う
- ・救急車要請を迅速化するため、チーム内のスタッフが直接要請できるようにする。

(会場によっては施設管理者が呼ぶことになっていて時間がかかる)

- ・冷却用プールなどを設置する

3. 熱中症防止のチーム環境を整える

- ・試合前には担当者や選手相互による観察を行い、選手の体調、健康状態を確認し、異常がある選手は試合出場を見合わせる。
- ・チームドクターあるいはゲームドクターが必ず立ち会い、適切な処置を行える状態にする
- ・常に水分補給できるよう、十分な量のドリンク・ボトルを用意する
- ・冷却のための氷を十分に用意する。
- ・ベンチエリア内で選手の健康状態を管理する専任のスタッフをおく。専任スタッフは医療従事者である必要はなく、観察・管理を専ら行うことを目的とする。
体温計で選手の体温を測定する（耳式体温計等）。状態の観察や話しかけにより選手の異常を早期に見極める。
- ・攻守両面に出場する選手は極力減らす。両面出場の場合、定期的にベンチエリアに戻る機会を設け、専任スタッフが健康状態を確認する。（特にラインマンの両面出場は要注意）
- ・攻守両面に出場する選手は事前にリストアップし、専任スタッフがプレー状況を観察する。
プレーの質が落ちてきた場合などは、速やかに指導者に報告し、即時交代させる。

4. 試合中に給水のためのタイムアウトを複数回設ける

厳しい環境状況では給水のためのタイムアウトを複数回設け、選手の熱疲労を軽減する。

- ・6分毎、場合によってはそれ以上の給水タイムアウトを設ける。
- ・タイムアウト毎に十分な時間を取り、給水には専任スタッフも付き添った上で、選手の健康状態確認をおこなう。（口頭のやり取りでロレツの回り方などを確認する）
少しでも異常が見られる選手はプレーから離れ休息を取るよう指導者に強く助言する。

5. その他

- ・プレー中に異常に気がついた場合、審判、チームスタッフ、主催者等、全ての立場で試合を中断する権限を持つことを確認する。

【中長期的な対策】

1. リーグ戦日程の見直し

国内の高温気象が常態化している実態を踏まえ、日本国内全体でフットボールシーズンの見直しを検討する時期に来ているのではないか。中学～社会人、リーグ戦日程からポストシーズンの選手権試合日程など、日本協会加盟団体全体で日程の検討に取り組む必要があるのでは。

2. 練習制限の検討

NCAA で実施されているような一日あたり練習時間、シーズンごとの練習日数・トータル時間の制限など、選手の安全確保に重きを置いたルールを作ることが出来ないか。平等な練習条件のもとで、勝つための工夫をする、新しい段階に上がるチャンスとも言える。米国など先進国に学ぶべきことは多いと考える。